

ワイズがこだわる「例会」
大切にしているもの、それは例会
戦前の例会
例会の要素
セレモニーの意味
例会の主役は
例会はクラブ活動の軸
メーキャップの勧め

2011年4月20日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

大切にしているもの、それは例会

ワイズメンズクラブは、発足時に、すでに活動していたロータリークラブやライオンズクラブなどに学び、ランチョン(午餐)クラブの方式を取り入れました。したがって、メンバーが食事を共にする例会をクラブ活動の中で最重要視しています。

東日本区では、「親睦か、奉仕か」、「事業か、例会か」という議論が行われた時期がありました。今は、「親睦」と「例会」を運営の中心に据えたクラブが多くなったように見えます。

ワイズメンズクラブの身近な存在で、理解者であると思っている YMCA の学生ボランティアリーダーの OB・OG が、意外にワイズに馴染めない理由のひとつが「例会」のようです。学生時代に、体を使って「奉仕活動」をしてきた彼らは、ワイズの中でも、何かに集中して取り組みたいと思っています。それが、のんびりと「例会」をやっている生ぬるさに、違和感と居場所の無さを感じるのだと思います。

学生リーダー、特にスキーやキャンプの時期に参加するプログラムリーダーは、YMCA 主事であるプログラムディレクターが決めた方向性と枠組みの中で力を出すことに慣れていきますから、例会を中心として運営されているワイズに、途方もない、まだるっこさを感じるのでしょう。

例会とは、リーダーたちにとってのリーダー会にあたるもので、親睦と奉仕の“心”を学ぶ場で

あると理解してもらうことが良いと思います。この理解は、ワイズメンにとっても重要です。

60 人近い会員数を誇り、100 人を目指している京都パレスクラブは、30 年以上も、「心を求めて例会に来たり、境地を得て例会を去る」をブリテンに掲げて、会員同士の親睦を深めること、例会を盛り上げることに全力を尽くしています。

戦前の例会

ワイズメンズクラブの前身である、米国トレドのトリムカクラブは、ランチョンクラブの例会方式を学びました。日本でも、大阪クラブの前身の「大阪 Y 倶楽部」がランチョンクラブを参考にしたようです。発案者は奈良傳主事ですが、その時代の大阪 YMCA の理事長が大阪ロータリークラブの創立会員だったからです。

大阪 Y 倶楽部は、夕食を共にして、卓話を聞く例会を最初から行っています。ちなみに、最初の卓話者は、アムステルダムオリンピックの陸上 800m の銀メダリスト・人見絹江でした。

日本のワイズメンは、例会を大切に、国際協会脱退後も、各クラブは例会を続けました。しかし、太平洋戦争に突入とともに、しだいに例会開催が困難になりました。

それでも、京都クラブは、京都市内への空爆が比較的少なかったこともあって、最後まで例会を続けました。クラブ名を例会日にちなんで「二火会」や「連青会」に変えるなどして、1945 年に

なっても、敗戦の8月15日までに3回の例会を行っています。

1945年1月16日には、新年例会を皇風煎茶禮式宋家宅で開き、茶を味わい、茶道の話聞いています。当時は食糧事情が悪化して、各自、弁当持参のこともありましたが、この日は、食事を各自すませて集まりました。例会案内には、「夕刻4時になるも、(空襲)警報の解除なき時は中止」とあります。

戦後の再開も京都クラブが早く、1945年10月10日に京都YMCAの三条本館で6人が集って開きました。「夕食は用意出来たが、“ムシイモ”」との記録があります。

大阪クラブの例会再開は、奈良傳・総主事の北京から帰還後の1946年5月以降、東京クラブは、同年9月25日でした。

例会の要素

例会の重要な要素は、例会日と時間、会場、プログラム、参加者でしょう。プログラムでは、卓話、食事が大きな比重を占めます。どのクラブも歳月をかけて、例会を磨き上げてきています。何気なく見えることでも、ひとつひとつに先人の工夫が偲べれます。

ここでは、例会をどうすれば良いかということではなく、それぞれの要素の現状にのみ触れます。

例会日と時間

現在、東京クラブ、横浜クラブ、大阪クラブ、神戸クラブの例会は、毎月第二火曜日に行われています。仙台クラブも、戦前は第二火曜日が例会日でした。戦前のクラブは、例会を同じ日に行っていました。これには、便利なこともありました。日本軍の中国進攻が国際的に非難され、国際協会から、日本のワイズメンの見解を求められたことがありました。このような時、日本区の全クラブの意見を一日で聴取することができたのです。

しかし、戦後になって、新クラブが続々誕生するようになると不都合が生じました。1956年6月時点では全26クラブ中、11クラブが第二火曜

日でしたから部長が、クラブ訪問をするためには、自クラブの例会を欠席し、しかもクラブ数だけ月数が必要になりました。メンバーも、他クラブ訪問にも不都合でした。そのため、新クラブの例会日をばらせるようにして、今日に至っています。

例会時間は、大阪クラブの前身の大阪Y倶楽部は午後6時開会でした。以後、戦後すぐに昼の例会を行った初代高松クラブを除くと、6時30分または7時開会で2時間の例会が標準的でした。

1970年代になると、開始時間が遅くなる傾向になりました。これには、企業において時間外勤務の増加、週休2日にするための週日の勤務時間延長、通勤圏の拡大に伴う勤務場所と例会場(自宅)との遠距離化などの理由によるものでした。

さらには、週休2日制となってからは、千葉クラブ、東京八王子クラブ、横浜つづきクラブなどが、土曜日に例会をもつようになりました。

一方、若いメンバーの勤務状況に合わせて、早朝6時30分から例会を行う東京サンライズクラブが1989年に生まれました(1994年から夜の例会に変わりました)。また、夜間外出が難しいメンバーが増えたこともあって、2006年から東京目黒クラブが、13時30分から15時30分までのお茶とケーキのアフタヌーン例会に変えています。なお、最近の話題としては節電の観点から例えば東京グリーンクラブは例会開始時刻の繰り上げ、例会時間の短縮を決めました。

例会の曜日や時間を、主力メンバーの都合によって変更しようと検討することがありますが、これは慎重を要します。黙っていても、他のメンバーはその曜日の出席のために戦ってきているのです。職場や家庭などの周囲の理解を得ていることが多いのです。また都合が悪くなった人の都合が、再度変わりかねないのです。

かつて、例会日の変更については厳しいルールがありました。インターネットのない時代では実現不能の条件でした。それだけ、一度決めた例会日は、簡単に変えるべきでないという強い意思がありました。

例会会場

例会会場をどこにするかに、例会に対するクラブの想いが表れます。決定には、さまざまな要素がからみありますが、いずれにしても、大人が集って憩うのに、ふさわしい会場、雰囲気望まれます。

2010-2011 年度東日本区『ロースター』によると、東日本区の各クラブの例会会場は、YMCA 施設 34 クラブ、ホテル・レストランなどの宴会場 20 クラブ、公的施設の集会室 8 クラブ、その他 5 クラブとなっています（2 箇所利用もあり）。それぞれメリット、デメリットがあります。

YMCA の施設の場合は、すべての地域にあるわけではありません。また会場のテーブル、椅子の配置も自分たちでやらなくてはなりません。食事の調達、配膳、片付けに難があります。しかし、かなり前からの予約が可能なこと、例会に必要な備品を預けられること、YMCA の活動に触れ、理解しやすい、会場費の形で YMCA の財政に貢献できる等の利点があります。

ホテル等宴会場は、そのための施設ですから、雰囲気や使い勝手は良く、食事も任せられ、予約も早くから出来ます。しかし、費用に問題を感じるクラブもあるでしょう。食事数の変更が難しいこともあります。

公的施設の集会室は、費用も安く、使い勝手も良いのですが、時間の融通が利かないこと、早めの予約ができないこと、食事や例会用品を持ち込む必要があることなどの欠点があります。

あまり例のないケースとして、松本クラブでは、ファミリーレストランの集会室を利用しています。食事に変化がつけられますし、急な食事の変更に対応できること、駐車場があること、例会の前後に打ち合わせや、懇親にも使えて便利です。

京都市内の 18 クラブ中、16 クラブは市内のシティーホテルを使っています。YMCA の施設は、YMCA の事業のために使用すべきだという意見もあります。

食事

食事は、会場によって決まります。通常の例会

においては、ホテルやレストランの場合は、予算に合わせて、ホテルに任せています。食事の出ない会場の場合は、弁当などを外部から持ち込んでいます。

珍しい例を紹介します。

東京世田谷クラブは、メネット・女性会員の手作りです。東京目黒クラブは、かつては、メネットがあるメンバー宅に集まり、幕の内弁当を作っていました。東京西クラブでは、YMCA を会場としていたときには、担当主事が、栗ご飯などを炊くことができました。湯気の出る食事は、男性メンバーに喜ばれましたが、狭い台所で、結局は食器洗いをするようになるメネットや女性会員には不評でした。YMCA が牧歌的な時代で、今なら、勤務時間に栗の皮を剥いていたことが、問題になるでしょう。東京南クラブ（2009 年に解散）には、受付で、おにぎりとお茶のボトルを選んで席に着いた時期がありました。

1980 年代に、横浜クラブは、例会の中で食事をするのは時間が惜しいと、食事をやめましたが、1 年で旧に復しました。

東京サンライズクラブは、例会では、テースティングタイムと称して、パンとチーズとワインが出て、例会後に、居酒屋で続きを行います。横浜つづきクラブは、例会場が飲食を認めないため、例会終了後、近くの釜めし屋などで食事を摂ります。両クラブとも、二次会として、例会と一体化していますが、不参加者もあり、気づかないうちにメンバー間の情報の格差を生じないように、心がけているようです。

例会会場での食事のために要する費用は、会場によって違いますが、500 円、1,000 円～2,000 円、4,000 円～5,000 円に、ピークがあるようです。これは、1981 年に調査した時と大きな変化がありません。

卓話

例会の魅力のひとつが卓話です。各クラブとも卓話者には、心を砕いています。

年間テーマを決めたり、シリーズにしたり、

時々話題や強調月間のテーマに合わせたり、ワイズの内部、外部など、工夫が見られます。

卓話者への謝礼は、クラブとの関係、交通事情、クラブの事情などによりますが、謝礼無しから、1万円くらいまでのようです。

セレモニーの意味

例会の開会点鐘、ワイズソングの斉唱、閉会点鐘は、どのクラブでも行っています。聖書朗読、感謝の祈禱、ワイズの信条の唱和などは、クラブによってまちまちです。これらを堅苦しいから簡略にしようという声もあります。

これは、人によって、クラブによって考えが違いうように感じます。

クラブも、例会も、日常の生活の一部なのだから、特に改まったものでなく、自然体でいいじゃないか、したがって、形式にこだわらず、普段のまままで良いという考えがあります。

一方、これは、人間理解にかかわることですが、人間には、良い人と悪い人がいるわけではない、残念ながら、その時々々に何に執心するかで、良い人にも悪い人にもなるという考え方があります。ならば、せめてクラブは、人の美しいところで接し合い、できれば、それを日常生活へ延長させていきたいという考え方もあるのです。

ですから、例会に参加する時の服装についても、普段着で良いと言う人もあれば、やはり、男性であればジャケット着用を義務付けたいという人もいます。

私は、クラブのセレモニーには、日常のしがらみや価値観とは離れた、交わりの空間をつくり、その理想に連帯感をもつための儀式だと思っています。

それは一時的であれ、社会的地位や長幼とは関係なく、日頃は、先生と呼ぶ教師、医師、弁護士であっても、職場の上下関係、取引上の立場の違いがあっても、一様に「さん(君)」と呼び合える関係であるのです。

茶の湯でいえば、ひとたびそこをくぐれば、身

分を超えた関係を生み出す、茶室の「にじり口」のようなものかも知れません。または、ボーイスカウトが道を究め、共に学ぶ研修所における「道心門」と同じ考えではないでしょうか。ここでは、社会的な地位、職業、年齢を門の外に置き、14~15歳の少年となって、腰をかがめ、頭を下げ、低い門を通るそうです。

あるいは、封建主義や全体主義の社会体制にあっても、民主的な運営を行っていたフリーメイソンの入会式の秘儀の伝統を継ぐものなのかもしれません。

クラブというものは、広く開かれたものを目指しながらも、連帯意識を生み出すための閉鎖的な部分が必要なのではないのでしょうか。

時間配分

例会の時間は、2時間か2時間15分です。この中に何を盛り込むかが問題です。

ランチョンクラブの先輩であるロータリークラブが毎週行う例会は、週日の昼12時から1時までの1時間が通常です。標準的には30分が卓話、15分が食事、15分がセレモニー(誕生祝いなども)とビジネス(報告)で、構成されます。報告などは毎週発行されるブリテンに託されることが多く、ニコニコも、例会前にあらかじめメモをお金とともに決められた袋に入れて、司会者が読み上げたり、ブリテンで紹介するなど、時間を節約しているようです。

ワイズの例会は、月に1回ですが、時間的には大分余裕があると言えます。しかし、盛り上がったからといって、時間を延ばしたりすることはありません。きちっと決められた通りに進行することを心がけています。岡本尚男さん(京都キャピタル)が、しばしば「分刻みの進行」と言うのは、そういう意味です。

これは、長い目で見た場合には、その方が長続きするからでしょう。

定型化された例会のプログラムに抵抗を感じる人もいますが、ダンスで「自分の好きなように

踊ってごらん」といわれ、短くは踊れても、長くは踊れないと同様で、毎月、新しい形式で例会を行おうとしても、すぐに行き詰ってしまいます。

むしろ、決った様式は守りながら、一部に変化を加えると、変化が引き立ち、新鮮に感じられることがあります。もちろん、不変である必要はないのです。

例会の主役は

例会の主役は、参加者です。出席率も大事ですが、絶対数が必要です。クラブメンバーの母数によって異なりますが、ビジターやゲストを含めて、最低でも 20 人以上の例会にはしたいものです。数の変化は、質の変化です。しかし、この壁を乗り越えられないで苦戦しているクラブが大半なのです。

ワイズメンの中には、出席人数を話題にすることを嫌う人がいます。まして、ビジターとかゲストを加えての人数には、見栄をはっていると、抵抗があるようです。

聖書に「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」とあるからなのかな、と思うことがあります。聖書の受け止めは人によって違います。私は、この聖句をクラブに当てはめるとすれば、少人数であることを肯定しないで、数人しか集まらなくても、その中で、会長、司会、受付を分担し合って、整然とした例会を行い、人数の増加を願って「時を待とう」という姿勢への励ましとして受け止めようと思います。

例会はクラブ活動の軸

ワイズメンズクラブにとって、例会は軸にあたります。出席を続けることが大切です。欠席が重なると、不思議なもので敷居が高くなります。

私の属している東京西クラブでは、毎月の地域を対象としたウォーキングを 14 年間、続けていますが、参加した婦人に言われたことがあります。「魅力を感じないコースですけど、それを選んで

いると続かなくなっちゃうので来ました」。自分のことをよく分かっている方だと思いました。

例会でも、卓話に興味湧かないと思えることがあるかもしれません。でも、毎月それを言っていたら続きません。

例会は「点」、その点をつなげて「線」となり、さらにクラブのさまざまな活動に参加することによって「面」になります。これに内外のワイズメンとの交流などが加わり、立体的になるのだと思います。あるいは、球形かも知れません。

「点」は孤立させてはいけません。庭の飛び石のように、1つ抜けると跳びにくくなってしまいます。そのためにもメーカーは必要なのです。

親しいクラブとの合同例会は楽しいもので、そのもたらすものは、大きいのですが、会場や例会日が変わると、どうしても欠席者が増えます。欠席者にとっては1年12回しかない例会の機会が、1回減るということに心したいと思います。また何かの会合を例会に振り替えることも、安易にすることではないと思います。これも出席率を減らします。この2つのケースは、ゲストにとっても出席の機会が減るわけですから。

メーカーの勧め

ワイズメンズクラブは、やむなく例会を欠席したメンバーにメーカーを奨励しています。欠席したメンバーが他の会合に出席することによって、欠席が消されるというルールです。この対象となる期間と会合名は『ロースター』の「東日本区定款施行細則」第8条にあります。最も簡単なのは欠席した(する)例会の前後のクラブ役員会です。役員会出席によって、クラブでの顔合わせ率を維持することができます。お薦めしたいのは、他クラブ訪問です。他クラブ訪問は、非常に良い経験になりますし、ここまで書いてきたことが、実感として理解いただけるとと思います。「メーカーは、義務ではなく、権利です」とは、齋藤総衛・元日本 YMCA 同盟総主事の名言です。他クラブ訪問は、何も難しいことはなく、『ロ

ースター』や東日本区ウェブサイトの「カレンダー」で例会日を確認して、そのクラブの会長か書記（富士山部の場合はドライバー）に電話で申し込めばよいのです。訪問に際しては、名札と例会費を持参するだけ。心するとすれば、クラブによって大切にしているものが違うことがあります。国旗、聖書朗読、感謝の祈祷、ワイズの信条、開会時間、閉会時間などです。これは理屈なしに尊重することだろうと思います。

あとがき

3月11日に起きた東日本大震災のために、19日の創立80周年記念会を中止した東京クラブの4月例会に、80周年に敬意を表すために出席しました。

この日は、40分の卓話に加えて、記念会の中止に至った経緯を含めた80周年記念事業についての会長報告、80年を振り返るスライド、記念事業の3つの基金への贈呈式、メネット会からの東京YMCAへの記念品贈呈式、月間強調テーマである“LT”アワー、オークション、40人ものスマイル、NYフロストバレーパートナーシップの報告が予定され、2時間15分の例会の中で、どうこなすかも見ものでした。東京クラブの時間厳守は定評のあるところだからです。

結果から言いますと、廣田光司東京YMCA総主事の短い報告も加わりましたが、誰も時間のことを口にすることなく、定刻の8時45分前に閉会しました。

私は、開会2時間近く前に会場に着く羽目になり、時間をつぶしていましたが、1時間ほど前には東京クラブのメンバー、メネットが10人ほど集まり、準備を始めました。次年度『ロースター』の校正の本人確認は、受付で済ませていました。80周年のスライドは、例会向けに7分間に編集し直していました。オークションはサイレントで、陳列した品物についた紙に金額を書く方式、スマイルは、テーブルごとの袋にお金とメッセージを入れる方式でした。

一番驚いたのは、それぞれの発言に重複と前置きと言いつがないことでした。わが身を振り返ると、「ブリテンに書いてありますが」とか、「本当は事前に準備すべきでしたが」とか「くだらない話を長々と話すことはないのですが」とか、実にどうでもよいことを言っていることに気づきました。前置きなしで話に核心から入れるというのは、訓練でしょう。伝統を感じました。

またまた、自慢話になりますが、私は、1967年に入会以来、例会に100%出席しています。もっとも、何回かはメーキャップでした。これは、入会した時に、「出席第一」と教わったためです。

最初に10年在籍した東京目黒クラブのブリテンなど一切の書類を、まったくくだらないことで失ってしまったために証明はできません。11年目からは、東京西クラブのブリテンに記録されています。これにはこだわって、欠席した時のメーキャップを記事にさりげなく書いたりしました。出席した例会の出席者欄から名が落ちてしまい、もはやこれまでと思ったら、掲載された例会写真の中に写っていたということがありました。

これは、本人・家族の大きな病気、1カ月を超える出張・旅行や転勤がなかったことによるものですが、東京にいてメーキャップが容易だったことが理由です。勤務先から1時間で行けるクラブが20くらいありましたから。

私の知る限りでは、村杉克己さん(東京北)は、メーキャップなしで100%出席と、上がります。故中村博さん(当時東京武蔵野)は、1956年以来、例会無欠席で、国際大会に出席の後、北欧のオブショナルツアーの途中で、自クラブの例会出席のために1人で帰国したことは語り草です。熱海グローリークラブには、もっと凄いメンバーがいるかも知れません。結局は、話のオチもない自慢話で終わりますが、若木であっても枯木であっても、例会を賑わせたことはささやかな貢献であったと思っています。